

第4回環境史研究会WS

近畿班

林と里の環境史

林と里の環境史(主に畿内・西日本)

時代区分	世紀	林と里の利用・経営	技術・産業	社会・制度	災害・被害・病害	域内人口	花粉(マツ属, コナラ亜属, アカガシ亜属, イネ科)
	21c				被害各地で深刻化		ナラ枯れ拡大
昭和・現代	20c	拡大造林政策・国土緑化運動 農田の荒廃	農林業で4,プロパンガス等化石燃料一掃化 エンジンチェーンソー輸入	木材価格下落 木材輸入自由化 太平洋戦争			マツ材積回復の高拡大
明治・大正 時代	19c	荒廃広がる	刈藪・肥料系肥料使用される 製炭技術の普及 金網製網拡大 青野林業全盛(1898) 遊歩車引置(田中勇造1898)	地方改良運動・部落若林野統一事業開始 森林法公布 市制・町村制施行 林野庁官・「林事」後の太政官布告			マツ材積回復の拡大
	19c		広益国産炭(大倉永常1844)に台湾クヌギ, 青野林業の記録 農業全盛(小西風録1878)				
江戸時代	18c		出雲の製鉄大がから中心に				
		半ウソウ千刈導入 宮野林業 織と牛蒡に依り専任職へ					各地で産産量あいつぐ
		宮野林業形成期	出雲大銀鑛 農業全盛(宮崎安直1896)に東越・各開拓・留付期物書法の記録 西廻り・東廻り航路の開通				
	17c	津田康の産産米始製	瀬戸内に入五式出川導入				各地で相増増加
				新田開発・商品作物の新産場へ			
安土桃山 時代		台場クヌギ成立?		太閤補給 お茶の産立 数寄屋造りの出現			
	16c	10年間「はち」の間(青野林業の記録)	大河川の治水特新				
戦国時代		小野(山) 資源的結集により生産者から経営者人化 山科「鳥林の松種すべの事」					
	15c		淀川水系の水運確立				河原上界で度額に洪水多発
			文藝に特産大銀鑛れる				
室町時代		金山新産科立で始まる?					
	14c	小野地 福山屋が新産 幕府の特産物産物					各種商品に産ができるが 幕府には産成させず
							製材の形成始まる
鎌倉時代	13c		御神領の製炭始製				
		草田園半野文書に「後山多樹り且く(山)一帯開					商品経済の発展に伴い山科相増増える

林と里の環境史(主に畿内・西日本)

時代区分	世紀	林と里の利用・経営	技術・産業	社会・制度	災害・獣害・病害
昭和・現代	21c			木材価格下落	獣害各地で深刻化 +ラ結丸拡大
	20c	拡大造林政策・国土緑化運動 野中の養伐	農村部でもプロパンガス等化石燃料一般化 エンジンチェーンソー輸入	木材輸入自由化 太平洋戦争	マツ材線虫病の再拡大
明治・大正 時代			刈藪・草肥系肥料ほぼ廃れる 製炭技術の普及 金肥利用拡大	地方改良運動・部落若林野統一事業開始	マツ材線虫病の拡大
	19c	養伐広がる	吉野林業全書(1898)、炭俵手引草(田中長盛1898)	森林法公布 市制・町村制施行 地租改正・「社寺土地」の太政官布告	
江戸時代	18c		広益国産者(大倉永常1844)に台場クヌギ、吉野林業の記述 農業余話(小西篤好1828)		
		千ウソウ千ク導入 吉野林業 樹立生産に伴い長伐期へ	出雲の製鉄大がたら中心に		
		吉野林業形成期	台切大鋸普及 農業全書(宮崎安貞1696)に密植・多間伐・短伐期施業法の記載		各地で猪鹿害あいつぐ
	17c	池田炭の商標名初見	瀬戸内に入浜式塩田導入	新田開発・商品作物の栽培盛んに	各地で相論増加
安土桃山 時代		台場クヌギ成立?		太閤検地 わび茶の成立 数寄屋造りの出現	
戦国時代	16c	10年間「はやし」の間 奇林期間の記載	大川川の治水技術		
	15c	小野山 資源の枯渇により生産者から仲買商人化 山科「鳥休めの松残すべきの事」	淀川水系の水運確立		

15c

淀川水系の水運確立

河床上昇で京都に洪水

室町時代

北山台杉什立て始まる？

文献に前換大銀現れる

小野岸 福山岸が翻狂 幕府の特権的産物

各種商品に座ができるが 薪炭には座成立せず

14c

惣村の形成始まる

鎌倉時代

13c

緋袴銀の銀跡初見

葛川明平院文書に「後山を伐り戻した」と表現

商品経済の進展に伴い山野相論増える

小野山に白岸生産集団
周防国を東大寺造堂料園として木材伐採

水田二毛作の発達

12c

池田から岸の献上記録

刈藪・莖大灰・牛馬糞・銚型農具普及等の農業技術発展

大原岸文献に見える

11c

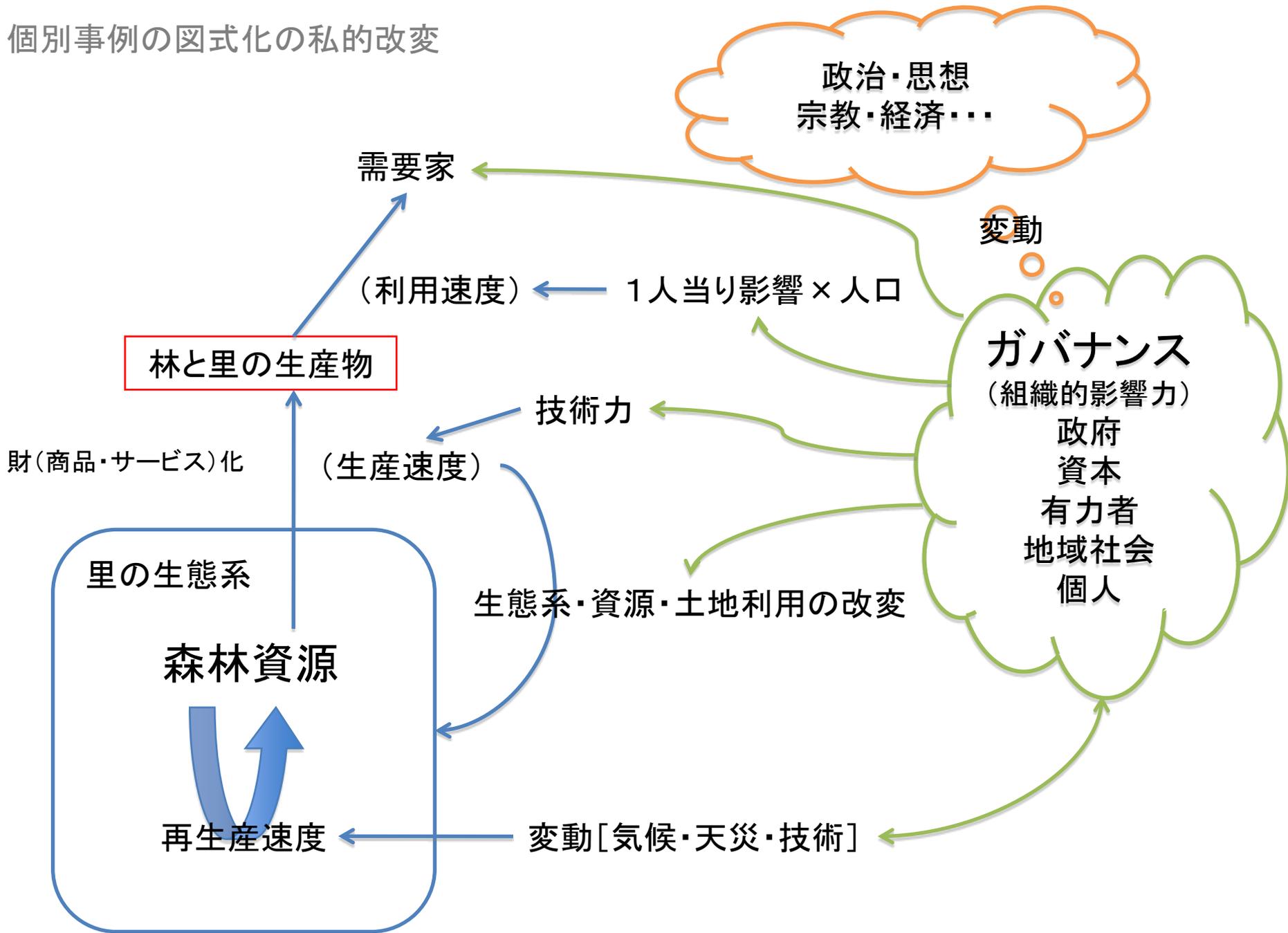
領域型荘園の形成と中世村落の成立

平安時代

10c

西暦	和暦	大阪・京都近郊	近江西部	丹後
7～8世紀			小規模な製鉄集団比良山地で活動	
818	弘仁9		比良山地の材木、造営用として一般の伐採禁止	
平安末期			比良牧、荘園化し木戸、比良、小松の三荘に	
平安末期			木戸荘から比叡山根本中堂に香木・松・榊などを備進	
鎌倉初期			木戸・比良荘と葛川との境界相論初見	
1261	弘長1		木戸荘と葛川との境界相論において木戸荘に山仕事を生業とする仙人の存在が記録	
1280	弘安3		小松荘(小松村)と音羽荘(打下村)との相論初見	
1612	慶長17		小松村からの石の切り出しを確認できる相論資料	
1638	寛永15		「毛吹草」に近江の名産として「木戸石(切石に用いる)」があげられる	
1662	寛文2		寛文大地震、湖辺の地形変化により田地が減少する	
1667	寛文7		守山村、福谷山出入にて草刈が困難に付き出作者よりの訴状出る	
1669	寛文9		和運3ヶ村と龍華3ヶ村の間で入会山をめぐり相論	
1672	寛文12		守山村、福谷山こえ草かり入許可方の出作者よりの訴訟起る	
1673	延宝1		同上事件北船路村への出作者存亡に関わる問題に付き、福谷山下草刈取り方の訴状出る	
1681	天和1		大物村1686年まで毎年堤普請、経費の下賜を願い出る	
1691	元禄1		木戸村と守山村の村領境にて草刈場に付き出入伊香立村仲介にて話合つく	
1708	宝永5		守山村、大雨洪水にて八町田、ぬりこ川被害発生、普請す 守山村、大浪にて被害発生	
1710	宝永7		北・南比良村と高島郡鹿ヶ瀬村が山境相論	
1713	正徳3		栗原村の山麓入会地開発をめぐり相論	
1716	享保1		享保年間頃、全国各地で猪鹿害あいつぐ	
1716	享保1		北小松村、打下村間の境界裁許絵図、この前に相論にあたり小松村から江戸へ直訴一処罰	
1716	享保1		守山村、八町田川の堤を設け、毎年川渡えをする	
1725	享保10		守山村、用水工事願提出、八町田川堤防大雨で欠壊する	
1734	享保19		「近江輿地志略」に特産物として木戸村からの庭石、庭松があげられる	
1735	享保20		守山村、大雨で川崩れて被害発生 守山村、猪垣造成につき役所へ援助依頼する	
1736	元文1		栗原村猪垣築造にあたり下竜華村と証文かわす	
1753	宝暦3		守山村、大雨、大洪水、山崩発生する	
1762	宝暦12		荒川村の山主と大物村の石屋が石の切り出しをめぐり争う	
1779	安永8		北比良村猪垣修復記録(以降数年おきに記録)	
1785	天明5		大物村四つ子川大規模な堤修復	
1789	寛政1		守山村、湖水位高く浜田被害を受ける、猪鹿被害甚大 大物村、寛政年間に木の猪垣を石垣に変える	
1805	文化2		東海道京都-大津間の車石の敷設に木戸石が利用される	
1819	文政2		文政大地震、北比良村の猪垣が破損する	
1822	文政5		南小松村助郷忌避の願い出に、近年猪垣を竹垣から石垣にした記述、また、石材資源が枯渇しつつある状況を記述	
1836	天保7		大風雨にて洪水、田地凶作	

個別事例の図式化の私的改変



杉の変容

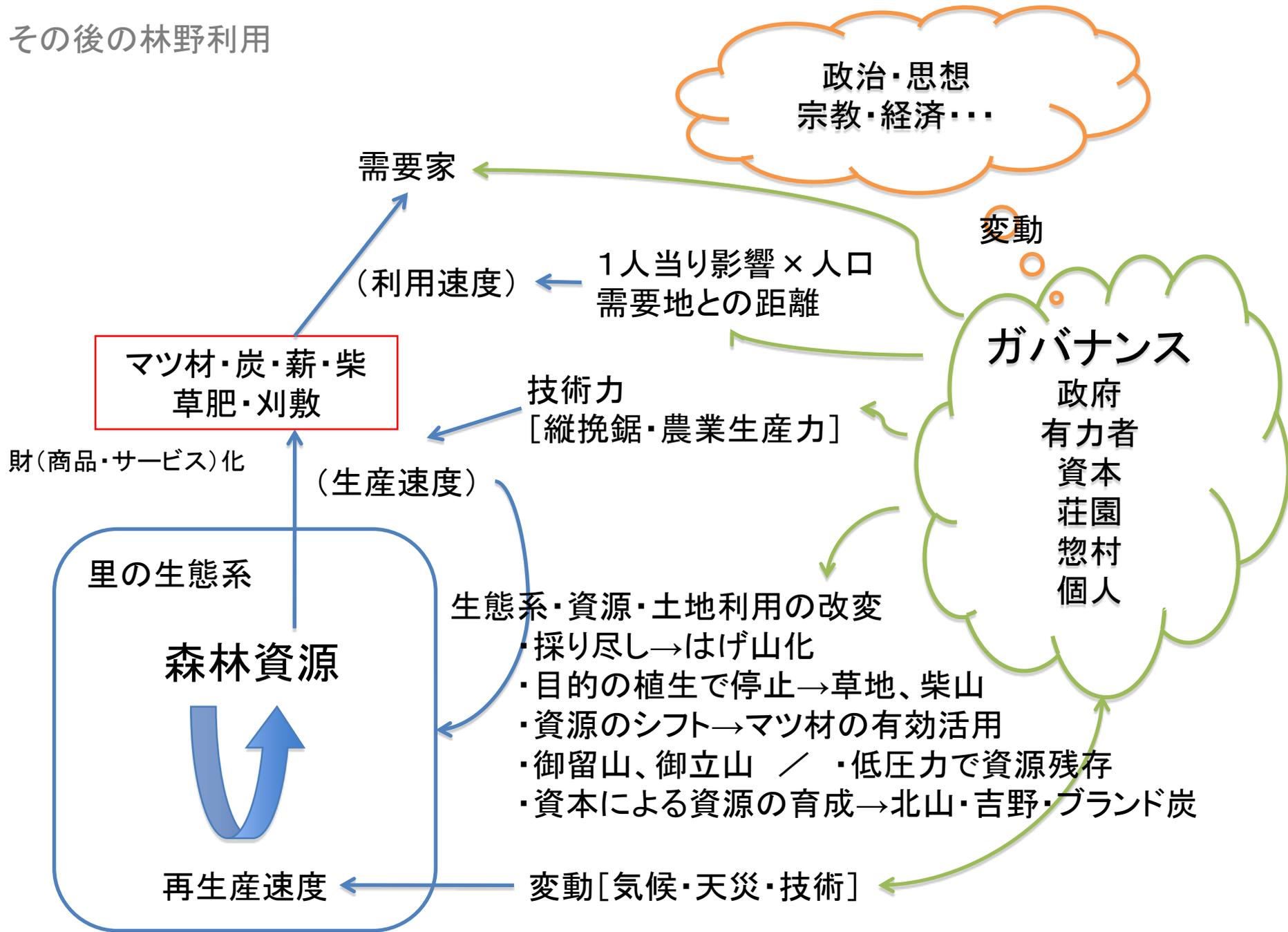


↑ 奈良期からの杉山

↑ 平安期以降の杉山

資源の枯渇や社会政治状況の変化により、次第に変容する。

その後の林野利用



近江西部の場合

- 中世以前の材木供給地としての役割から近世以降、草刈り場としての重要性増大→頻繁な相論
- 近世以降、石材の有名産地として山地からの盛んな切り出し→近隣での資源の枯渇と相論

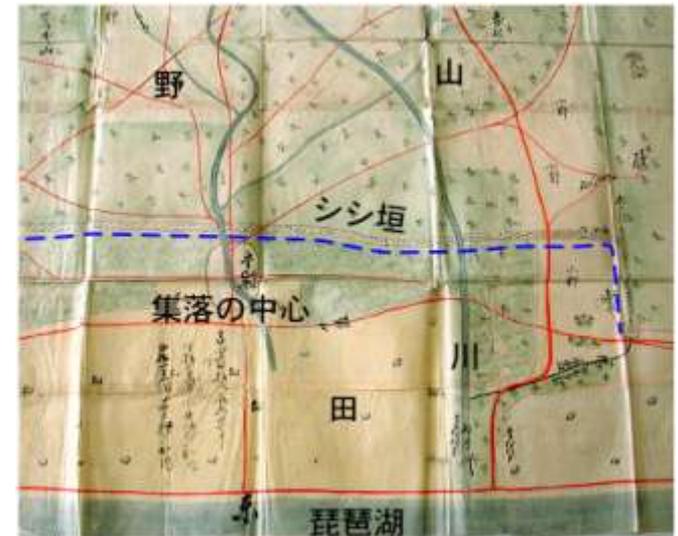


並行して起きた現象

- 頻繁な河川氾濫被害・土砂災害
- 獣害の拡大

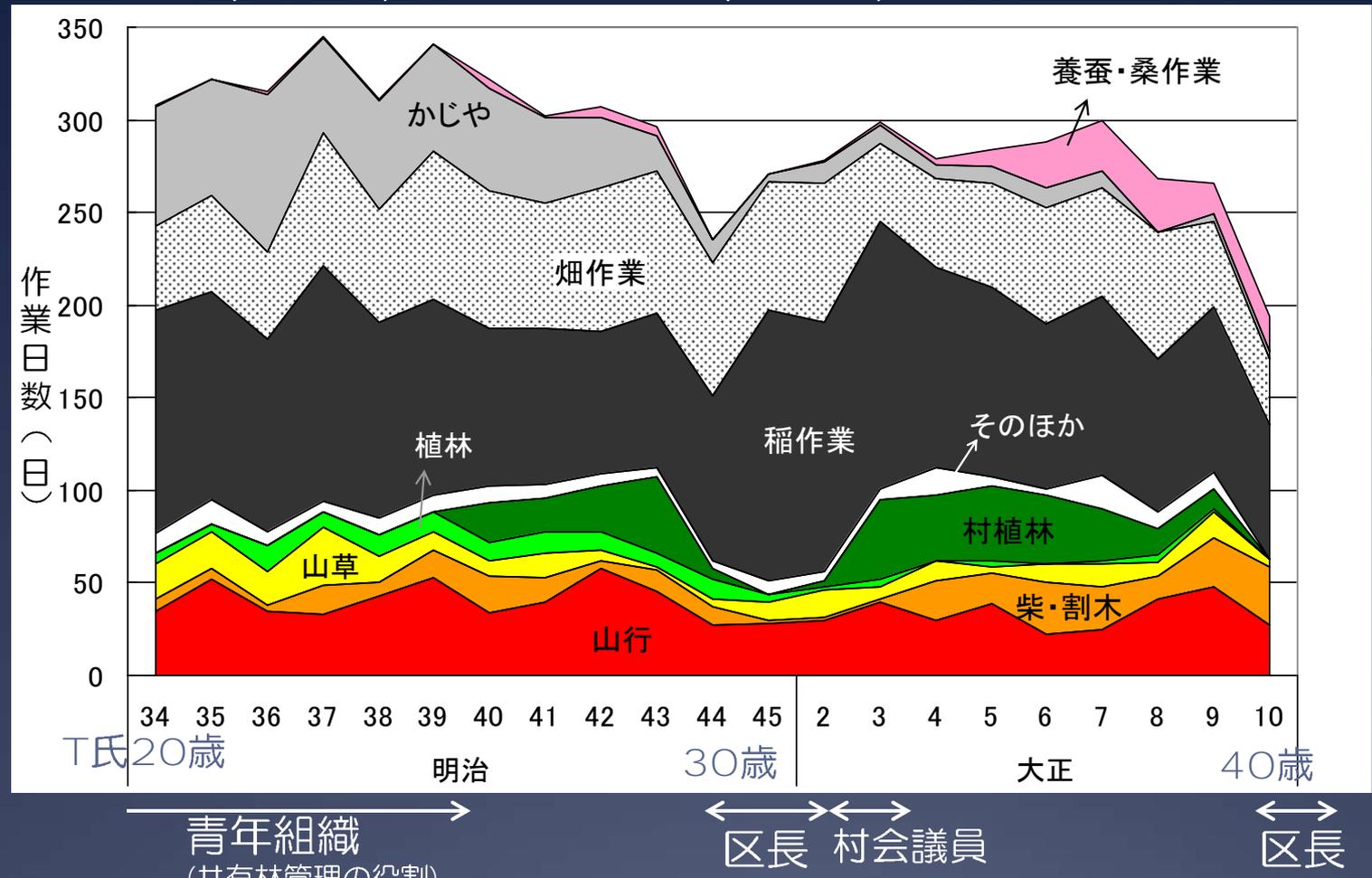


- 高度な堤防，治水施設の構築に膨大な労力と費用をかける（百間堤など）
- 獣害防備のため猪垣の構築と高度化（木柵から石垣へ）



結果① 資源利用の21年間の変化

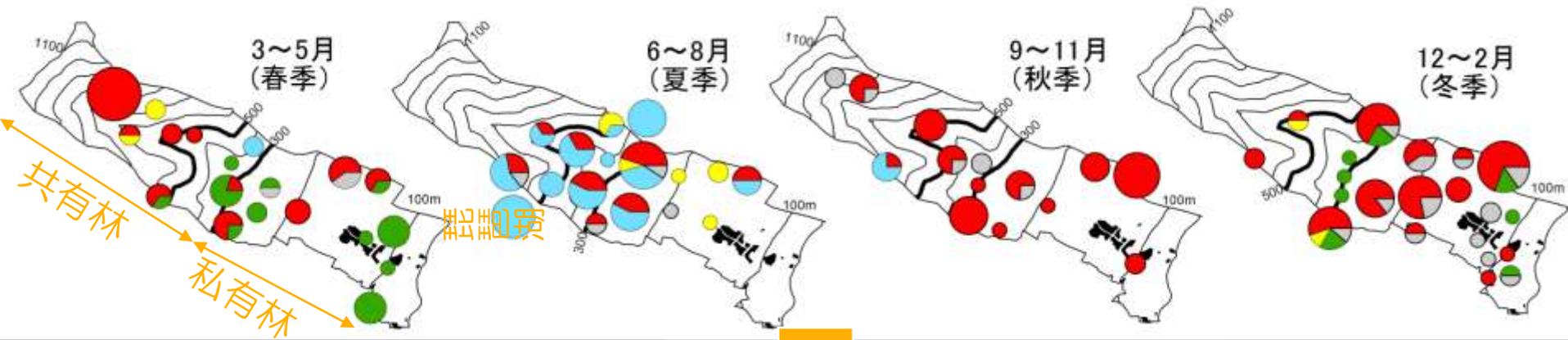
明治34年(1901)から大正10年(1921)における年間作業日数



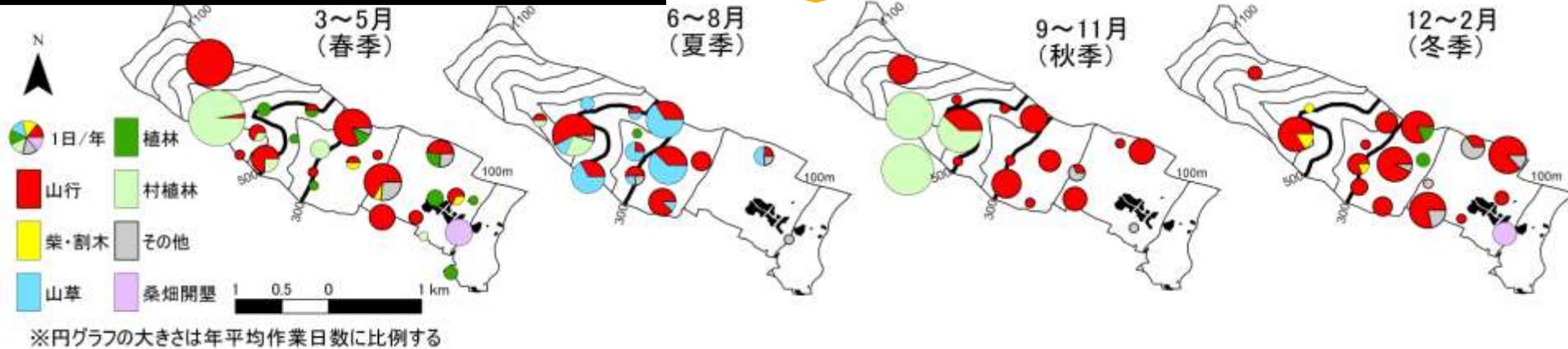
- * 山草, 柴・割木 (自給的な資源利用)
 - 村の植林事業, 柴・割木生産や養蚕 (資源の財産化・商品化)
- * 国や県の政策など社会的動向にも対応した変化

結果②山林資源利用の季節的なサイクルとパターン

明治34～39年(1901-1906)



明治40～大正9年(1907-1920)



- *季節的なサイクルは大きな変化はない
- *明治40年頃を起点に「村植林」「桑畑開墾」のパターンが登場
- *共有林の北側＝従来からの利用が継続→パターンの変化は場所によって異なる

聞き取りに見る共同体内規制

- * 宮座制度の中での山林管理責任
 - * 六人衆による山境管理
 - * 山調方による利用の監視



- * 柴草石の搬出システムに組み込まれた山林保護
 - * 搬出路の下側と谷頭部の伐採禁止
 - * 春山行ききの時期制限
 - * 搬出量自体の限界



京阪近郊の場合

鹿背山の1880年代以降の土地利用年表

時代区分	キーワード	農地				山林		粘土・陶土・土砂		
		水田	畑	果樹園	陰伐地	割木生産	植林	陶磁器生産	瓦生産	鉱物採取
第1期 (1889～1911年)	近代化 近郊農業地域として 発展		凶作茶を掘り おこし薩摩芋・ 桑栽培					陶磁器・瓦 生産		
第2期 (1912～1938年)	鉄道網発達 陶磁器生産停止			富有柿の栽培 開始	日照確保、肥 料、燃料供給			鉄道網発達 停止		
第3期 (1939～1954年)	戦中戦後の食糧難 食糧増産		開墾 拡大							
第4期 (1955～1973年)	食糧需給好転 米の生産調整 柿畑拡大 燃料革命 農業の機械化 兼業化	果樹園 へ転用	果樹園へ転用	面積 拡大	日照確保の 役割のみ	プロパン ガス普及	スギヒノキ の植林			ケイ砂採 取
第5期 (1974年～)	開発 学研都市 農業の高齢化、 兼業化 竹林拡大		農地買収、 兼業・高齢化、						ダルマ窯か らガス窯 大生産地販 路拡大	

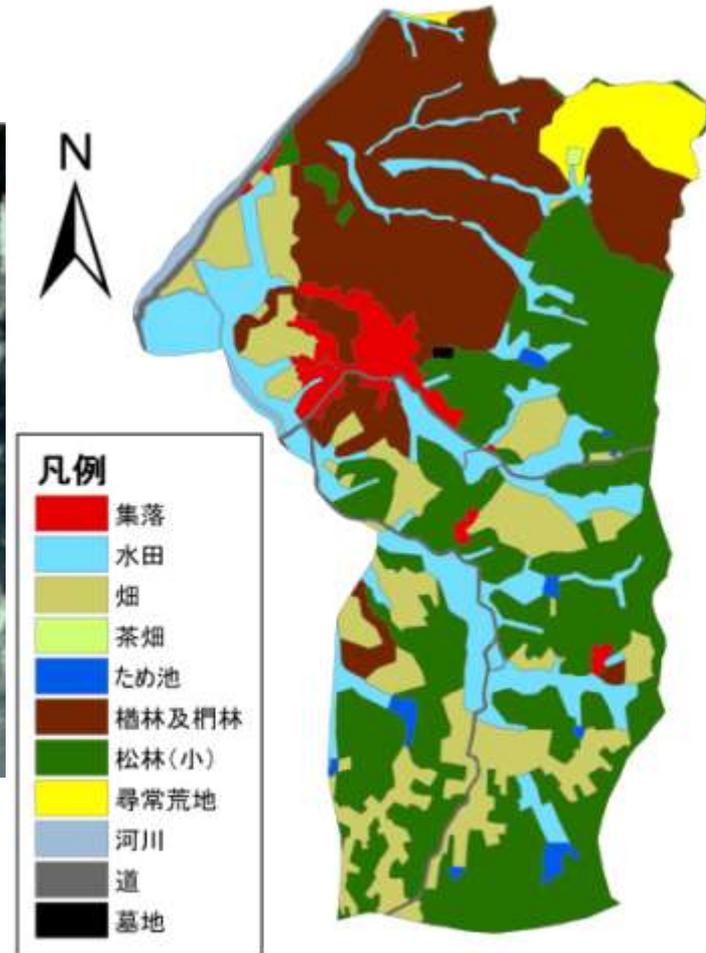

→ 主要な土地利用
- - - - - → 一部の土地利用

結果

第1期 (1889年～1911年)

- ・木津川の水運利用
- ・近郊農業地域
- ・陶磁器生産

第1期の土地被覆図



- ・里山林
ナラ・クヌギ林
松林
荒地
- ・農地
谷部：水田
斜面：畑

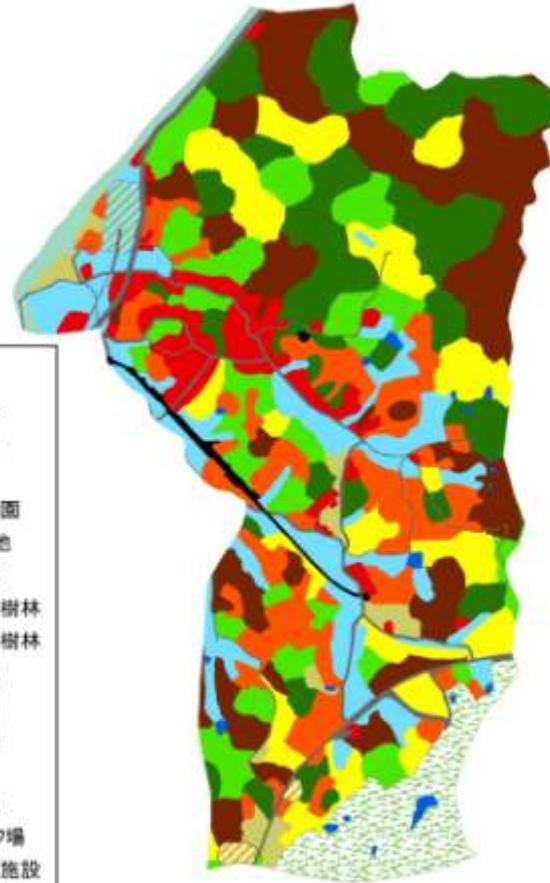
1,000 500 0 1,000メートル

結果

第5期 (1974年～現在)

- ・学研都市開発に伴う農地買収
- ・農業の高齢化、兼業化の進行

第5期の土地被覆図



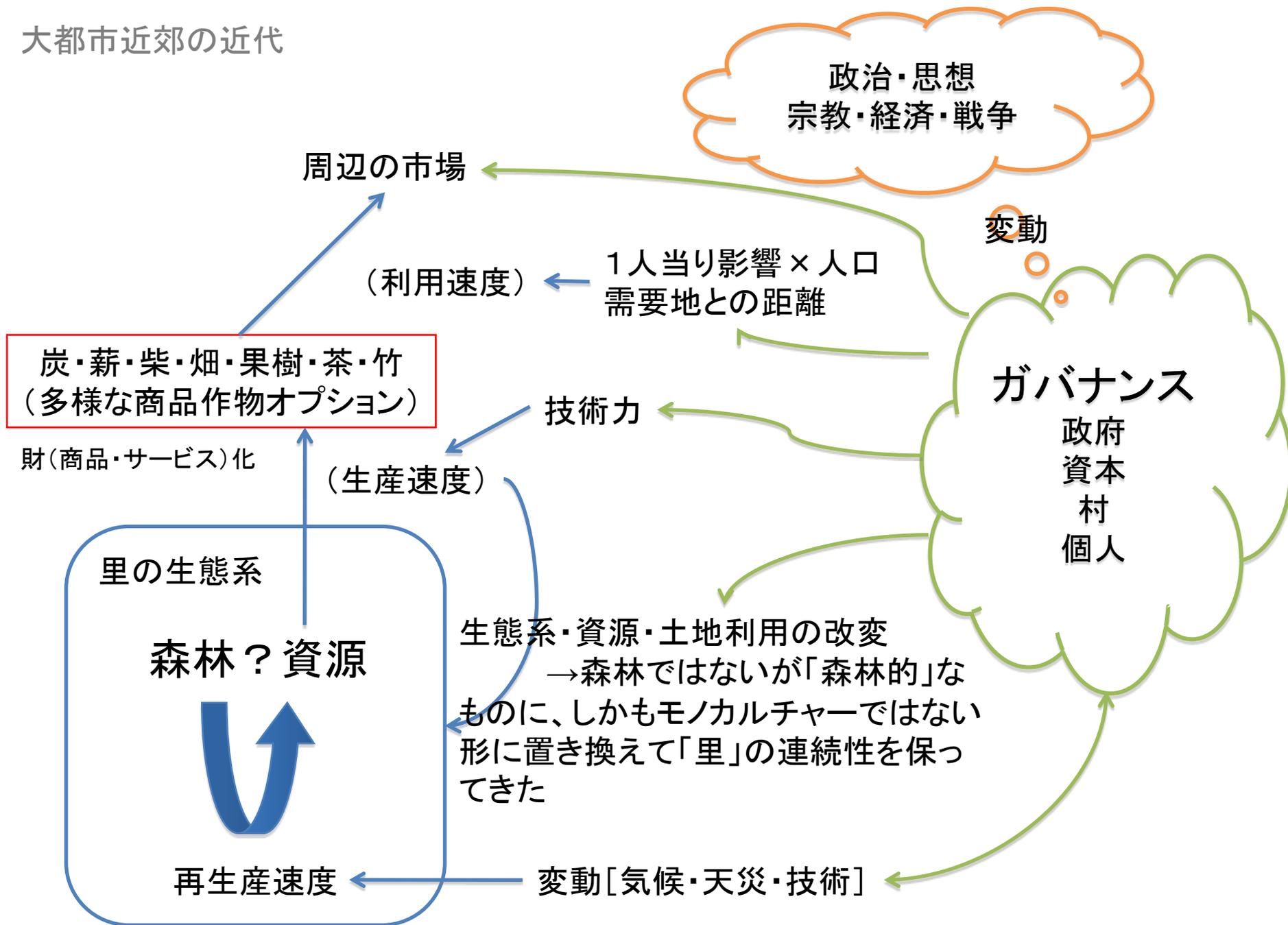
凡例	
赤	集落
水色	水田
黄	畑
オレンジ	果樹園
青	ため池
緑	竹林
茶色	広葉樹林
濃緑	針葉樹林
黄	荒地
水色	河川
黒	線路
灰	道
黒	墓地
点線	ゴルフ場
斜線	水道施設
斜線	その他

1,000 500 0 1,000メートル

- ・里山林
- 荒地、竹林拡大
- ・農地
- 田畑減少
- 竹林、荒地拡大



大都市近郊の近代



おまけ: 吉野林業

